

2017.6

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま 富 薬

6号

第39巻
No.335



ドクダミ *Houttuynia cordata* Thunb. (ドクダミ科 *Saururaceae*)

生薬

ジュウヤク（十薬） 6月頃の開花期に地上部を刈取り、水洗する。水切りも兼ねて少し陽乾した後、束ねて風通しのよい軒下など日陰に吊るして乾燥する。

成分

精油：nonylketone, capric aldehyde, ketodecanal, methylauryl sulfide, myrcene, 臭気成分(decanoyl acetaldehyde, lauric aldehyde) 等、フラボノイド：quercitrin, isoquercitrin 等。

効能

主に民間薬。利尿、便通、高血圧予防に煎じて服用する。解毒、胚の排膿薬として化膿症、湿疹、蓄膿症、中耳炎などに煎服する。生の葉は抗菌作用、解毒作用が強いいため、腫れ物や蓄膿症、湿疹、水虫、かぶれに外用する。痔や脱肛も同様に用います。あせもやかゆみに浴湯料として使う。



生薬 ドクダミ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



一見、日本全国どここの陰地にも繁茂する雑草のため、どこにでもある雑草と思われがちですが、本州以南の日本全土、朝鮮、中国華北以南、インドシナ半島など東アジアの特産種です。特異な臭い故にほとんどの人が知っている植物でもあります。白色円柱形の地下茎は長く伸び、またよく分枝して広がり、所々から直立する茎は高さ20～50cmになり、互生する広卵状心臓形の葉は種小名 *cordata* (心臓形の) の語源になっています。初夏、茎頂に穂状花序で無花被の小花を多数開きます。花穂の下に4枚の花弁状の総苞片を付け、一つの花のように見えます。小花の付け根にほとんど目立たない小さな苞片がありますが、まれに苞片が発達し、白くなるものをヤエノドクダミ (*f. plena*) と言い、また葉の白斑と日光を当てて栽培すると紅斑が入る品種、ゴシキドクダミ (*f. variegata*) などが園芸種として栽培されています。

中国では『名医別録』(502-536) の下品に「葳(かたまって生える草)」の名で収載されています。地下茎を縦横に広げ、節ごとに茎を延ばし繁茂する様子を表していると言われています。『新修本草』(659) には「葳菜」の名で収載され、野菜として用いたようです。『名医別録』にも「多く食べば人をして气喘せしめる」とあり、古くから食べていたことが伺えます。『救荒本草』(1406) にも「根をよく煮て食うべし。また、よく煮たるを飯の上におきて蒸して食うべし」とあり、葉ではなく根を食用にしていました。李時珍(1518-1593) も『本草綱目』(1590) の菜部に収載して「その葉には鯉(生臭い) 気があるところから俗に魚鯉草と呼ぶ」と現在の中国名の語源が独特の臭気から名づけられたと言っています。中国では今でも葉や根茎を食用にし、韓国ではお茶として飲む以外に豆腐や豚肉と一緒に料理して用いたり、ベトナムでは生春巻きやフォー(米粉麺) に他の香菜類と一緒に用います。タイでは茎を生食するなど身近な野菜として食べられているようです。

日本においても『本草和名』(918) には「菜62種」の中に、『和名抄』(931-937) では「菜蔬部水菜類」に「之布岐」、「之布木」の名で記されていて、いづれも野菜としての扱ひであったようです。ここで云う「之布岐」「之布木」は「葳」の異音「シフ」と草を意味する「キ」からの合成語と考えられています。しかし、その独特の臭気からかあまり食べられることはなかったようで、『大和本草』(1709) に「どくだみと云う。又十薬とも云う。甚だ臭いあしし。家園に植えれば繁茂して後は除きがたし。駿州、甲州の山中の村民、どくだみの根を掘り、飯のうえに置き蒸して食す。味甘しと云う。本草にも柔滑菜類にのせたり。されども本邦の人、あまねく食わず、菜とすべからず」と記されています。江戸時代に入ってそれまで「しぶき」と呼ばれていたものを俗にドクダミ、十薬と呼ぶようになっていました。『物類称呼』(1775) に「葳菜、じゅうやく、しぶき。江戸にてどくだみ、武蔵にてぢごくそばという。上野にてどくだ草という。駿河沼津にてしぎとばなと云う。越前にてどなべという」とあり、江戸の方言であったことが伺えます。ドクダミの語源は「毒矯め」、「毒止め」と考えられ、毒消しとしての薬効から付けられたと推測されています。他に臭いの強烈さから毒を溜め込んでいるという意味で「毒溜め」語源説、毒や痛みにも効能があるという意味で「毒痛み」という説もあります。生薬名ジウウヤクは『大和本草』では「和流の馬医之を馬に用い飼う。十種の薬の能ありとて十薬と号すと云う」とあるところから名づけられたとされていますが、「葳」をジウウとも読むところから葳菜と書き、簡略な文字「十」を当てたという説が本当のようです。(村上守一 記)